

「2018年9月12日のこと」

14才のとき、モーツァルトの交響楽に憧れて作曲家になりたいと志してから、早いもので四半世紀が経ちました。今思えば当然のことですが、美しい曲を生み出すというのはそんな簡単なものではなく、先の見えない私の修業時代は30才を過ぎても続きました。

その後、色々なご縁を得てコンサートデビューを果たしたのは2014年12月、わずか3年前、実に私は36才になっていました。あれから3年、素晴らしい演奏家の皆さんに自作を奏でてもらうという、「一生に一回だけでいいからどうか！」と幾度となく文字通り夢にまで見たことは数多く現実となりました。

諦めなくてよかった・・・今の私の切なる本心です。

そんな私に残された究極の悲願はむろん「オーケストラ音楽の発表」です。その機会が40才を目前にして巡ってきました。

---

"The World of Yohei TAMAMURA vol.3" 「わが街、わが協奏曲、そして・・・」

日時 2018年9月12日(水) 19:00

会場 豊中市立文化芸術センター大ホール

---

新作は「ヴィオラ協奏曲」。日本人では別宮貞雄(1922-2012)先生以来かな？というマイナージャンルへの挑戦ですが、小峰航一さんという当代屈指のヴィオリストを得て、筆は順調に進んでおります！

そしてトリは「この方しかいらっしやらない！」人気作曲家・吉松隆先生の交響曲第6番です。なぜ吉松先生の作品かといいますと、私がクラシック系の作曲を続けている理由として、2000年に吉松隆先生の音楽を知ったことが極めて大きいからです。

今に至るまで現代の楽壇は無調の作品が主流を占めており、メロディーやハーモニーのある音楽は相手にしてもらえません。私自身も「映画音楽をやりたいし、それしかないな」と思っていた矢先でした。ですので、交響曲や協奏曲といったクラシックスタイルに寄り添いつつ、極めて美しく現代的ロマンをたたえた吉松先生の音楽は私にとってまさしく衝撃的なものでした。

それから「こんな音楽を私も作りたい！」と吉松作品のCDを聴きまくり、耳コピーしてピアノで弾いてみたり（当時は出版譜が少なかったのです）、どういう生き様をすればこうなれるのかと年譜を調べたり絶版の著書を図書館へ借りに行ったり、気がつけば私は完全な「吉松派」となっていました。

「直接習ってはいないが吉松先生は私の心の師匠だと勝手に思っている」と公言する私には批判もよせられました。そんな私に「問題ない。光栄である」という吉松先生からのお返事をマネージャーを通じ頂戴したのは2度目の自作展を開いた翌日の2016年12月8日、この日のこと、嬉しくて泣いていたこと、私は忘れることができません。

そんな私がオーケストラ公演を行うにあたって、一生に一回かもしれない機会であり吉松先生還暦の境地たるこの傑作を再演したい、もうこれしかないと考えました。

どうか多くの方にこの日、我が新作とともに聴き届けていただきたいと思います。

作曲家 玉村洋平